

日本大学芸術学部 「芸術学部紀要」 第73号抜刷 令和3年3月

探偵小説における共通モチーフ別対比考察―2
―乱歩と清張の場合―

高野 和 彰

本論文は、芸術学部個人研究費課題「探偵小説における共通モチーフからの対比考察」における、江戸川乱歩・横溝正史・松本清張ら三者の作品の共通のモチーフを切り口とした対比・考察の初期段階として、乱歩と清張の作品対比を試みたものである。本論では、昨年度の正史に続き清張との対比に歩を進め、モチーフ及び構成面において乱歩作品との共通性が高い清張の短編作品を取り上げ対比を行い、その差異を精査した。

探偵小説における共通モチーフ別対比考察——2

—乱歩と清張の場合—

高野 和 彰

本文

令和元年度は、探偵小説（非推理小説）における共通モチーフからの考察というテーマで江戸川乱歩（一八九四～一九六五）と横溝正史（一九〇二～一九八二）の作品を取り上げ対比・考察を行った。本論では次なる段階への一歩として、乱歩の作品と松本清張（一九〇九～一九九二）の作品から共通のモチーフを内包する作品を取り上げ、対比を試みる。

一、「心理試験」における構成の特徴について

乱歩の作品からは「心理試験」（一九二五）を取り上げる。この作品は一九二五年、雑誌「新青年」に発表された作品である。主人公の路屋清一郎が犯罪を犯すに至った動機から実際の犯行の様子、その後の工作と結末まで、全てを犯人側に依った視点から描く「倒叙形式」で描かれていることがはじめに述べておくべき特徴であろう。この形式は、英国の推理作家であるリチャード・オースティン・フリーマン

(Richard Austin Freeman 1862-1943) の短編小説「歌う白骨」(The Singing Bone 1912) に初めて描かれたと言われている。^(註1) この倒叙形式について、乱歩は随筆「日本の探偵小説」(一九三五)において、ドロシー・L・セイヤーズ(Dorothy Leigh Sayers 1893-1957) の分類に基づきつつ、探偵小説の形式を四つに分類しまとめている。ここで乱歩の挙げた形式は四種類あり、それぞれ「論理の文学」(第一形式)、「謎々(パズル)文学」(第二形式)、「謎(ミステリー)の存在に重点が置かれた文学」(第三形式)、「倒叙形式」(第四形式)とされている。このうち、特に第四形式については、乱歩自身がその定義を詳細にまとめているため、次に引用する。

私のいわゆる第四形式とは、犯罪発覚の経路を犯人の側から描いた探偵小説を意味する。これはかつてフリーマンが探偵小説の新形式として試みたところのものであって、短篇小説には多くの類型を見るのであるが、小説の冒頭から真犯人が登場し、綿密周到の手段によって犯罪を行う。その真相を第二者である探偵が暴くという転倒形式のものである。これは往々にして単なる犯罪小説と混同されやすいのであるが、それと異なるところは、たとえ犯人とか犯罪手段とかが読者に明らかになっているとしても、第二者である探偵がいかにしてそ

の難解の謎を解くかという点に論理的な興味を感じられる意味で、探偵小説の一種と考えて差し支えないのである。^(註三)

探偵小説は通常、探偵役又はその助手役の視点からの描写を基本とし、犯罪の結果(死体など)と手掛かりから犯人を推理していく形式が一般的である。

対して、乱歩の解説を含めた「倒叙形式」は、はじめに犯人と犯行の様子を描き、探偵がどのようにして犯人を明らかにするのか(犯人目線で言えばどこから足が付くのか)に焦点を当てた形式である。この「倒叙形式」を採用することで、トリックよりも犯人の心理とその異常性に焦点を当てることが可能になる。換言すれば、人物の心理描写などに重きを置いた私小説のように、人物の内面を描写することがより効果的となる。さらに言えば、広義のミステリに含まれるような、犯行の真相が明らかにされない物語や、読者に謎の解決を委ねるような構成も可能となる。

さて、そのような「倒叙形式」で描かれた『心理試験』であるが、最も注目すべきは、やはり主人公であり犯罪者の落屋清一郎であろう。作中において落屋は、下宿屋の老婆が貯め込んでいる大金を奪うために殺人という犯罪に手を染める。着目すべきはその動機の心理である。作中では「あのおいほれが、そんな大金を持っているということになんの価値がある。それをおれのような未来のある青年の学資に使用するの、きわめて合理的なことではないか」と語られている。そして、そのような身勝手な動機で老婆殺しの計画を実行する過程において良心の呵責などは一切なく、問題となるのは次に記すような一点にのみあつた。

難点は、言うまでもなく、いかにして刑罰をまぬがれるかということにあつた。倫理上の障礙、即ち良心の苛責というようなことは、彼にはさして問題ではなかつた。彼はナポレオンの大掛りな殺人を罪悪とは考えないで、むしろ讚美すると同じように、才能のある青年が、その才能を育てるために、棺桶に片足ふみ込んだおいはれを犠牲に供することを、当然のことだと思つた。^(註四)

この点について、動機の面からその特徴を考察していくこととする。

張っている、同じ空部屋を見たとしても、ペンキ屋の仕事は見なかつた筈なのだ。ところが、判事にその空部屋のことを尋ねられると、ありのままに云うのが安全だと思つて、つい余計なペンキ屋のことまで喋らうとする。これを喋つたら、たつたそれだけの些細なことで、凡ての嘘がばれ、殺人罪が確定してしまうのだ。私はこの心理的な恐怖がたまたま面白く思つた。^(註五)

乱歩の言葉通り、『心理試験』のプロットは「罪と罰」から着想を得たものであることは明確である。乱歩の作品において、モチーフとして挙げられる文学者及び作品としてはアメリカのエドガー・アラン・ポー (Edgar Allan Poe 1809-1849) や谷崎潤一郎(一八八六一一九六五)といった作品が多い中で、ドストエフスキーの名が挙げられることは珍しい。もつとも、乱歩はドストエフスキーの作品を愛読しており、先述したように随筆などにもその事実を遺している。少なくとも、愛読していたドストエフスキーの作品から着想を得ていた事に関しては、留意せねばならないだろう。

『心理試験』にて描かれた心理試験は、連想診断法と呼ばれる種類のもので、特定のキーワードに対して連想したものを答え、反応時間を計測し記録する方法である。これは、キーワードに対してどのような答えをするか、また答えを意図的に考えているかどうかを反応時間から判断する。作中では落屋と友人である斎藤が容疑者として試験を受けている。犯罪を連想するようなキーワードに対して落屋が即答する反面、斎藤は特に時間を要している。通常であれば、心理試験の結果がそのまま根拠資料となり、事件に関係しているかどうか、容疑者として妥当であるかどうかを判断することになる。つまり、作中での結果であれば、犯罪に関係ある単語に対して返答が遅い斎藤が犯人となる。

しかし、実際に犯行を行ったのは落屋であり、斎藤にとっては濡れ衣である。落屋は、心理試験の反応時間の計測という特性を逆手にとり、時間を掛けず、かつ怪しまれないような回答をするための(練習)を積むという方法を取ることで、この試験の裏を掻いたのである。これは乱歩が言う「トリックのひっくり返し」^(註六)である。また、犯罪を連想させるキーワードに対しての「反応時間の早さ」という点から、言わば「正常の中に潜む異常」を察知されることで、逆に怪しまれてしまうという、さらなる「ひっくり返し」へと繋がってゆく。

心理試験は、科学的な分析手法によって人間の隠された心理を詳らかにするという試験であるが、いかなる科学的分析手法をもつてしても、人間の隠された心理を

二、「心理試験」における異常な動機とそのモチーフについて

『心理試験』における落屋の犯行には、正当性を装った詭弁が存在している。それが倫理的に正しいかどうかはここでは問題にならない。ただ、動機から犯行までが、落屋の独善性によって行われていることが重要なのである。老い先短い老人が大金を貯めこんでいるという事実があり、老人がそのような大金を使わずに貯めこんでいることは無意味であるとする。そのような大金は、後生大事に貯め込んでおくよりも、自分(＝落屋)のような学資に困っている前途有望な学生のために使われることこそが最も有意義であるという結論へと繋がる。このような経路を経て、所謂「確信犯」としての論理がここに完成する。倫理的に考えれば破綻している点が多いが、少なくとも思想的な正当性は保たれていると言えるだろう。

また、奪った大金を安全に手に入れるために、大金の半分は現場に残しておいたり、遺失物として届けたくえで半年後に正当な手続きを経て受け取るといった落屋の工夫も、自らが捕まることを避けるという目的を踏まえれば、妥当な手段と考えることが可能であり、特段おかしいと思われる点はない。このように、『心理試験』では、人物の論理的思考に独善性という要素を加えることで、落屋という人物の造形に一層の深みを持たせると言えるだろう。

さて、このような「確信犯」落屋の造形についてであるが、ロシアの文学者であるビョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー (Фёдор Михайлович Достоевский 1821-1881) の『罪と罰』(Преступление и наказание 1866) が作品のモチーフになっているという事実を無視して論ずることはできない。この点に関しては乱歩自身も随筆「楽屋断」にて、『罪と罰』を読み返したと触れただけで次のように述べている。

白状すると、実はあの小説の中のすばらしい思ひつきを、そっくり拝借した訳である。あの小説の中に、ラスコリニコフが老婆を殺したあとで、一階下の空き部屋に隠れることがあつて、その時ちょうどペンキ屋が部屋の壁を塗っていたが、ラスコリニコフはそれを覚えていて、後日子審判事にかまをかけられ、ついペンキのことを喋らうとして、ハッとしてあぶら汗を流す所がある。というのは、ラスコリニコフは犯罪の行われた日には、そのアパートへ行かなんた嘘を云っているので、つまり数日前に行つた以来足踏みをしないと嘘を云い

正確に把握することは不可能であるという側面も描かれている。ある場合においては科学的分析によって正しく心理を把握できたとしても、それが絶対ではないという、人間心理に関する科学的手法の持つ効力の是非を簡潔に表しているのである。これは人間という存在が科学だけでは決して解決し得ない謎であることを示しており、なおかつ科学万能への一種のアンチテーゼであると言えるだろう。

三、清張作品における「心理試験」との関連性

清張作品の中で、乱歩の『心理試験』に通じる要素を持つ作品として挙げるならば、『偽狂人の犯罪』(一九六七)が最もふさわしいだろう。この作品は「小説新潮」に発表された連作(原題「十二の紐」・改題「死の枝」)の中の一編である。主人公である経師屋猿渡卯平が、ふとした事故から修繕を依頼されていた日本面を焦がしてしまい、その弁済のために高利貸しである荒磯万太郎から金を都合するというところから話が始まる。この時点で、物語の発端・動機に「金」という共通項を見出すことができる。その動機の面での異常性についても落屋に通ずるものが見られる。猿渡が荒磯の殺害を決意したのは、日に日に膨れ上がる借金とその督促を背景とし、浮気相手であった女中のサワ子を荒磯に横取りされたことが最後の一押しだった。金がらみのトラブルから殺人に至るケースや、男女関係の連れから殺人にまで発展してしまうケースは、探偵小説でもとりわけよく描かれる動機ではある。(後述するが、清張も随筆において言及している)

これだけならば、猿渡という人間の異常性を示す根拠にはならないだろう。しかし、清張は猿渡が荒磯殺害を決意する場面で次のような引用を行なっている。

いつか読んだドストエフスキーの「罪と罰」でラスコリニコフの言つた言葉を思い出した。この大学生は金持の老婆を殺そうと計画して、それを理論の上で合理化させている。《一方には無知で無意味な、何の価値もない、意地悪で、病身な婆あがいる——誰にも用のない、むしろ万人に有害な、自分でも何のために生きてるかわからない、おまけに明日にも一人で死んでいく婆あがいる。——すると一方には、財力の援助がないばかりに空しく挫折する、若々しい新鮮な力がある。しかもそれが到るところならなんだ! あの肺病やみの愚劣で、意地悪な婆あが命が、社会一般の衡にかけてどれだけの意味があると

思う？ 虱か油虫の生命と何の選ぶところもない、いや、それだけの値すらない。だって婆あの方が有害だからね。あれは他人の生命を蝕むやつだ」全く荒磯満太郎ときたら、このロシアの大学生が憎悪する殺戮の老婆以上だ。彼は社会の害虫である。(後略)

ここでは「罪と罰」のラスコーリニコフが老婆殺しを決定した際の動機が引用され、そのまま猿渡の心理へと重ねられている。端的に言えば、猿渡もまた「確信犯」として荒磯を殺害するのである。この「確信犯」という犯人像の造形は、「心理試験」の落屋に見られる造形と共通している。細かな差異はあるものの、「金」にまつわる思惑から「老人」を殺害する「若者」というプロットは両作品に共通するものであり、かつ共通のモチーフとして「罪と罰」の存在があったことは留意せねばならないだろう。

この動機の心理について、清張は随筆「推理小説の発想」(一九五九)の中で次のように語っている。

私は、何によらず、動機というものはすべての人間の犯す罪において、いちばん大事な点ではないかと思っています。動機のない犯罪というものはありません。そして、動機のある犯罪は、人間がもっとも窮極の立場におかれたときの性格の現われではないかと思えます。したがって、動機を追求すること、すなわち性格を描くことであり、人間を描くことに通じるのではないかと、いう考えをもっているのです。(中略) 一般に、犯罪は、金銭の上のこと、愛欲、復讐、自己防衛といった動機から起ることが多いと思われまます。こういうものは、われわれが人間生活をしている以上、いちばん多いケースであることは勿論で、これを否定するわけではありませんが、それ以外に、もっと人間的な感情とか意識から生まれる犯罪だつてあるのではないのでしょうか。われわれが、普通平凡な日常生活を送っているときには、まったく影をもとめていないように見えるけれど、実は、自分でも気のつかない意識を心のどこかにもっている、ということが考えられるのです。そして、ひとたび、なにか異常な事件にぶつかったと、ヒョイとその隠された意識が飛び出し、それが行為に発展するのではないかと考えられます。したがって、隠された意識、われわれが気がつかないところの第二の意識、奥底の意識をひき出して、それから起るところの事件なり犯罪は、それこそ相当人間の突っ込める分野ではないかと思

連性を徹底的に断ち切り、安全に老婆の財産を手に入れようとした。対して、猿渡の場合は殺人を隠すことも、その犯人が自分であることを隠そうともしないという点が決定的に異なっている。清張は「罪と罰」に於ける、ポルフィリーが精神病の犯人が大審院にて無罪となった事例を語る場面を引用しつつ猿渡の心理を次のように描写している。

猿渡卯平は「これだ」と思った。そうだ精神病者になることである。これだから、文句なしに裁判官は無罪を言い渡す。なまじつか、完全犯罪を計画するから犯行が暴露するのである。緻密な犯罪計画を企めば企むほどどこかに欠陥が存在して破綻が生じるのは、古今東西の探偵小説や実話物の教えるところである。狂人ならば衆人環視の前でも大胆に人が殺せる。なにも緻密な計画を立てて、足音を忍ばして深夜荒磯の住居に忍びこむことはない。死体を隠したり、アリバイを作ったりする面倒も要らない。猿渡卯平が精神病者になろうと決心したのは、このときからであった。

猿渡は精神病者を装うことで、法廷での無罪を勝ち取るという方法を思いついたのだ。確かにこの方法であれば、殺人を隠したり綿密な完全犯罪を考える必要はなくなる。犯罪を犯したことが明白であっても、その責任能力が無いと判断されれば有罪とならない法律を逆手に取ったのである。(作中では刑法第三十九条が論拠として示されている)

事件捜査にあたる警察は、隠された死体や凶器を探したり、犯行の動機を調べることに長けていても、精神病者か否かの判別に関しては専門家ではない。加えて、作品が発表された六〇年代という時代背景を考慮すると、精神病者か否かを判断するための基準が明確ではなかったであろうことは容易に想像できる。通常であれば、いかにして犯罪自体を隠すかという点が犯人の最も腐心するポイントであり、同時に警察(探偵役)が犯罪を捜査・立証するための出発点でもある。この発想の差異がそのまま、乱歩がボオの作品より見出した「出発点の怪奇性」を表していると言える。とりわけ、作中で猿渡が選んだのは精神分裂症と呼ばれる精神疾患である。この疾患について作中では次のように説明される。

もっとも偽装にふさわしいものは精神分裂症のように思えた。何故ならば精神病は精神及び身体的な症状をもとにして診断されるが、精神分裂症はこの身体

ます。

このように、清張は動機の描写について人間の深層心理までを意識しながら述べている。動機のある犯罪は、人間がある窮極の立場に置かれた際に発生するとしているが、作中における猿渡が置かれている状況はまさに窮極と呼んで差し支えないであろう。仕事の依頼は来ず、借金は膨れ上がり、意中の女性も奪われた。生きるための金も人生を彩る女性も失い、生きること自体が困難になっている。このような状況は、普通の日常から考えれば「異常」と言ってもおかしくはない。普通平凡の日常から一転して、そのような立場に置かれてしまった猿渡だからこそ、先述した「確信犯」としての強い意識が顔を出し、その意識に従って行為に発展することができるのだ。そして、その原動力は「日常生活への渴望」と言っていいたいだろう。

猿渡が欲したのは、金でもなく意中の女でもなく、自身の生を脅かす荒磯という存在の死だ。荒磯が死ぬことによって、猿渡は自身の生を送り続けることができる。後には、その生を獄中ではなく、普通一般の人間と同じように送りたいという願望があるのみである。清張の描いた人物にはそのような人間の現実味を感じさせる造形がなされていると言えるだろう。

この点で「心理試験」の落屋を改めて見てみると、その差異もより明確になる。学資に迫られる日常の中でふと大金を持っている老婆に出会うなどということは、異常な事件に他ならない。換言すれば、乱歩の描いた落屋もまた、清張の主張する窮極の立場に置かれていたと言える。しかし、落屋の場合その原動力となつては「理念」である。金は古い先短い老人の生活よりも、優秀な若者に使われることが正しいという理念に基づき、落屋の犯行は実行される。自身の学資という面を言えば、それは副次的な産物に過ぎないのだ。さらに言えば、落屋には、その副次的な産物をもって、自身の生をより良いものにしよとする意思がある。偶然という好機をきっかけに、自身の理念と生をより具体的にしていけるのである。この点が、乱歩と清張の人物造形の差として表れていると言えるだろう。

動機については乱歩作品との共通項と差異を精査することができた。では、次は一体何に着目するべきであろうか。それは、猿渡が「何」をまねがれる為に知略を巡らせたかという点である。作中で猿渡が最も腐心したのは、「いかに殺人を隠すのか」ではなく、「いかにして刑罰をまねがれるか」という点にある。この点については、「心理試験」の落屋と同様と言って差し支えないだろう。

ただし、落屋はあくまで、老婆殺しを目的のための手段とし、殺人と自身の間的基礎が全く判っていない、とある。(中略) これによると、いわゆる精神分裂症は身体的な徴候は認められなくとも、心理的な立場からだけで診断されるという。卯平は、これはいいと思つた。

猿渡は、その判断の根拠が最も乏しい精神疾患を選んだ。根拠に乏しいということは、それだけ真偽の判別が困難であることを意味する。無論、基本的には専門家が診断するのであるから、精神異常を装うと言っても一筋縄ではないことは明白である。しかし猿渡は、精神分裂症に見られる症状を詳しく研究し、その看破手法についても丹念に調べ上げた。万が一にもこれらの調査を行なっていたことが発覚せぬよう、偽名を使いながら都内の図書館を順に巡るといふ徹底ぶりである。その上で、いくつかの看破手法の裏を掻くため、徹底的な「練習」を行なった。

彼は夜布団の中に入ると、本でおぼえたことをこっそり練習したり、女房の居ないときは家の中で稽古したり、また人目にふれない場所に出て反覆して自己訓練をおこなった。まさに死刑と対決しての賭けである。敵は精神病医である。次には検事と裁判官であった。そのためには十分な練習と鍛錬とがなされなければならない。最も重要なことは、いかなる危機を迎えても動揺しない胆力を養わなければならないことだった。巧妙なる演技をする人間はある。しかし、死刑と対決しての勇氣と不動の精神は、いかなる名優でも獲得し得ないものであった。

猿渡の「練習」についてはこのように描写されている。この過程は、精神病という病に対して、科学的な分析と周到で綿密な練習をもって、正常な自分を異常な自分という殻で覆うことに成功したと言つて良いだろう。その甲斐もあり、猿渡は詐病の疑いを多少残しつつも、精神異常者であるとの鑑定結果を裁判所に提出させることに成功する。この点もまた、連想診断を科学的に分析し、練習を持って攻略しようとした落屋の造形と共通するところである。

科学的な診断や捜査に対して、同じく科学的な視点から相対するという構図は、探偵小説の一つのセオリーである。落屋に対して行われた連想診断も、猿渡が目をつけた精神病の種別と看破手法も、人間(特にその心や精神)という存在を科学的な視点や知見から分析するという点では、科学で人間を解き明かそうとする面で共通しており、十九世紀から二十世紀にかけての科学に対する過度な信頼へのアンチ

テゼでもあるのではないだろうか。

『心理試験』では、薩屋の魂胆は「正常の中の異常」という観点から看破されてしまったが、『偽狂人の犯罪』でも、最終的には猿渡の思惑は見透かされることになる。作中の終盤では、副島検事と河田検察事務官という二人の人物が登場する。副島検事は、猿渡が詐病を演じているという疑いを捨てることができず、何らかの方法でそれを暴きたいと切望していた。しかし、猿渡は科学的な練習を持って演じている為、同じ科学的な手法では見破ることが出来ないという堂々巡りの状態に陥っていた。しかし、河田のある提案で、猿渡の詐病は隣く間に見破られることになる。

その提案とは、猿渡に対して猿談を聞かせるというものである。猿渡は一年近く独房の中で精神異常者を演じ続けていた。つまりそれだけの期間、外界との接触が断たれているのである。たとえ独房であろうとも、生命維持のための最低限の食事と睡眠を取ることは担保されている。つまり、人間の持つ三大欲求である「食欲」「睡眠欲」「性欲」のうち、前者二つは獄中においても満たすことが可能なのだ。対して最後の「性欲」だけは満たす術が基本的には存在しない。そんな状態の人間に、猿談を聞かせたら一体どうなるのか。普通の人間であれば、何らかの生理的反応を示さずにはいられないだろう。本当の精神異常者でない限りは、正常な生理反応が表れることは必至である。

十五分もすると、涙を垂れているような顔つきの猿渡が、だんだんその声に耳を傾けるような素振りを見せてきた。彼の弛緩した表情には次第に緊張が現れた。彼は、そつと房の前に目を配った。廊下には終夜点いている電灯の光が冷たく映えているだけであった。(中略) そのうち彼の青白い顔に血色が上ってきた。朗読の箇所は、どうやら佳境に入ってきたようであった。(中略) 猿渡卯平の全身は耳と化していた。彼の眼はぎらぎらと光り、顔を充血させ、額に汗を滲ませ、荒い息づかいで喘いだ。彼は落着きを失い、身体をよじりはじめた。彼は房の入口の横に誰かが忍びより、端から眼だけを出しているのを少しも知らなかった。

猿渡が猿談を耳にした場面はこのように描写されている。精神病者であれば、外部からの刺激、特に言葉を紹介した理性的な刺激に対しては反応を示さないことが普通であると作中では説明されている。しかし、猿渡は猿談という刺激に対し正常に

が逮捕されるまでに至ったのである。この「意外な結末」に着目すると、そこにはある暗示が秘められているようにも考えられる。

乱歩は、『罪と罰』から着想を得て理念を持った殺人犯・薩屋を生み出した。そこには自身の理念を根拠とし行動を起こせる人間としての恐ろしさと、現在よりも良い生を掴むという意思が投影されていた。対して清張の場合は、一見すると理念を持つ殺人犯と取れる側面を持ちながらも、その実態は情動的な動機による犯行と、自らの生の維持を目的とした、より人間的な欲望が投影されていた。

これらの描写は、多少の差異を含んではいるものの、全てにおいて、人間という生き物は誰しもが善悪の両面を持っており、いかなる人物であろうとも、ふとしたきっかけ(それは自分自身でも想像できないような)で、悪の側へ転んでしまう可能性を秘めているという暗示と言えないだろうか。さぶには、悪を暴く・裁く立場の人間が、俗物的な意識が顔を出してしまったために破滅する様までを清張は描いている。本来であれば悪を裁く立場の人間が、俗物性を露見させたことで破滅へと向かう様を描いた清張は、まさに「人間を描く」作家であるといえるのではないだろうか。

註

- 一、ハワード・ハイクラフト (Howard Haycraft) 『娛樂小説の殺人』(MURDER FOR PLEASURE: THE LIFE AND TIME OF THE DETECTIVE STORY 1912) (林峻一郎訳 一九九二年 国書刊行会) の八八頁にて「犯罪の物語全部を最初に提出しておいて、それから探偵による解決へのみちを書くという実験をした」との記述がある。
- 二、江戸川乱歩「日本の探偵小説」(『江戸川乱歩全集 第十六巻 鬼の言葉』一九七九年 講談社) 二〇三頁
- 三、江戸川乱歩「心理試験」(『江戸川乱歩全集 第一巻 屋根裏の散歩者』一九七八年 講談社) 一一七頁
- 四、同書 一一八頁
- 五、江戸川乱歩「楽屋囁」(『江戸川乱歩全集 第二十二巻 わが夢と真実』一九七九年 講談社) 一一六頁
- 六、江戸川乱歩「楽屋囁」(前掲五回) 一一五～一一六頁にて、「トリックというものは、外国人が殆ど書き尽くしている」と前置きしたうえで、裏返しやひっくり返しとい

反応してしまった。言うなれば、「異常の中に潜む正常」を発見されたことで詐病が暴かれてしまうのである。この「異常の中に潜む正常」という図式は、『心理試験』の薩屋とはまったくの正反対である。つまり、清張は乱歩の描いた科学的な擬態とその看破を、逆の視点から描くことに挑戦し、実現させたと言えるだろう。

四、人間を描くということ

これまで見てきたように、『心理試験』と『偽狂人の犯罪』には大まかな構成から人物造形、科学的な思考とその練習といった共通のモチーフが散見された。唯一にして最大の相違点は、清張が乱歩の『心理試験』以上の「結末の意外性」を描いていたという点であろう。『偽狂人の犯罪』は、先述した副島検事と河田事務官がそれぞれ左遷・退職という形でその幕を閉じる。作中における両名は、猿渡の詐病を看破した立役者である。そんな二人がなぜ左遷や退職という道を選んだのか。

猿渡を落とす為に使用された猿本は警察の押収品である過激な品であったのだが、猿渡の一件後、河田はそういった品を他者に見せることに快楽を見出してしまったのである。

「私は、自分がそんなものを見て楽しむというのではなく、人に見せることが楽しくなったのです。どんなに澄ましている人でも、エロ写真や枕絵を見せると昂奮します。(略) 笑いにまぎらわしたりしていますが、その眼の色はごまかされません。私はそういう他人の擬装ぶりを崩して、本性をあばいてゆくのが好きになりました」

警察に捕えられたとき、河田検察事務官はいった。彼は知合いの刑事から次から次に押収品を移しくもらっては、人々に見せたり与えたりした。それが判ったのである。暴露した直接動機は、彼がそんなエロ本を人妻に読んで聞かせて誘惑したので、その夫から襲撃されたのだった。

作品の結末部において、河田の顛末はこのように描かれている。人間の本能を刺激し本性を看破する行為は、本来は猿渡の嘘を暴くためのものであった。しかし、結果としてその行為は、河田という人間の本能をも刺激してしまい、ついには自身

う発想によって自作品の筋を考案していることについて述べている。

- 七、松本清張『偽狂人の犯罪』(松本清張全集 第六巻 球形の荒野・死の枝) 一九七一年 文藝春秋) 三二二頁
- 八、松本清張『推理小説の発想』(松本清張全集 第三十四巻 半生の記・ハノイで見ること・エッセイより) 一九七四年 文藝春秋) 三九四頁
- 九、松本清張『偽狂人の犯罪』(前掲七回) 三三三頁
- 十、江戸川乱歩「探偵作家としてのエドガー・ポー」(『江戸川乱歩全集 第十八巻 幻影城』一九七九年 講談社) 一〇八頁にて、ポーの作品を例に「出発点の怪奇性」と「結末の意外性」についての記述が残っている。
- 十一、松本清張『偽狂人の犯罪』(前掲七回) 三三五頁
- 十二、松本清張『偽狂人の犯罪』(前掲七回) 三三八頁
- 十三、松本清張『偽狂人の犯罪』(前掲七回) 三三五頁
- 十四、江戸川乱歩「探偵作家としてのエドガー・ポー」(前掲十回) 一〇八頁
- 十五、松本清張『偽狂人の犯罪』(前掲七回) 三三六頁

参考文献

- 江戸川乱歩『江戸川乱歩全集第一六巻 鬼の言葉』(一九七九年 講談社)
江戸川乱歩『江戸川乱歩全集第一八巻 幻影城』(一九七九年 講談社)
江戸川乱歩・松本清張 編『推理小説作法 あなたもきつと書きたくなる』(二〇〇五年 光文社)
小田慶郎 編『清張地獄八景』(二〇一九年 文春ムック・文藝春秋)
加納重文『松本清張作品研究 付・参考資料』(二〇〇八年 和泉書院)
高橋哲雄『ミステリーの社会学 近代的「気晴らし」の条件』(一九八九年 中央公論社)
松本清張『松本清張全集 第三十四巻 半生の記・ハノイで見たこと・エッセイより』(一九七四年 文藝春秋)